

Title	中国に於ける草制制度について(Abstract_要旨)
Author(s)	山本, 隆義
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1966-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/211744
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

【 8 】

氏 名	山 本 隆 義 やま もと たか よし
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 19 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	中国に於ける草制制度について

論文調査委員 (主 査) 教授 田村実造 教授 佐伯 富 教授 吉川幸次郎

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は中国歴朝における詔勅の制撰にあたった官と官府とについて、これを制度史および政治史の上から考察している。論文は三編から成るが、その概要はつぎのとおりである。

第一編は秦・漢時代を扱う。秦代は史料を欠くため、前漢の制から逆推して、この時代草制にあたったものを天子に直隸する少府の尚書郎という。

前漢代は三期に分け、国初から武帝までは秦制をうけて少府の尚書郎が、武帝から成帝までは官官の中書謁者の令・僕が草制にあたり、成帝以後は漢初の旧に復したことを論証する。ついで後漢代には尚書郎の地位が高まって朝政にも参与するに至ったことを述べ、この間の事情を政治上、社会上から考察する。

第二編は三国から魏・晋・南北朝・隋・唐をへて五代にまで及ぶ。この期はいわゆる貴族制時代にあたるが、前代の尚書に代って新設の中書の諸官である監令・侍郎・舍人らが草制を担当した。著者はこのように変革された事由を、君主権との関係において考察し、魏晋以来尚書が公的機関となり、もはや天子の内局としての役割りを果しえなくなったことに求めている。

なお、魏晋以後中書と門下との政治的地位をとりあげ、それらがしだいに国政の中心となるに至った事情を説明し、このような中書・門下の抬頭が、やがて唐代における三省鼎立の素地を形成した点に言及している。さらに南朝期に中書舍人の官を寒門に開放したことに注目し、これを南朝歴代の君主権強化策に関連づけて論述する。

唐代では国初中書舍人が学制を掌ったが、玄宗朝に翰林学士が設置されて以後は、草制が学士（内制担当）と舍人（外制担当）とによって分掌される内外両制制度が開かれ、これが草制上の一特色となった。著者はこの点に着目し、当時の政界における学士の活躍やその出自などについて検索したのち、学士設置の意義を考える。

第三編は宋・元・明三朝を扱う。この期は政治上天子独裁制の時代にあたるので、草制制度をそれとの関連において考察する。

宋代も草制に学士と舎人との内外兩制制度がとられたが、なかでも学士がもっとも重要視された所以を、学士擢用の過程とその職掌内容との両面から例証する。

元代には、中書舎人が廃されて草制を翰林が専掌したこと、翰林は国史院を併せて翰林国史院となり、さらに蒙古翰林院も増設されてその機構が拡大されたことをのべ、このような機構の拡大は、元朝として詔勅の頒布にあたり、漢文勅書のほかに国語の勅書をも添えざるをえなかったその特殊な国家的性格（征服王朝）に因由するものである点を指摘している。著者はさらに元代草制者の出自について考え、漢人出身者の比較的多い点から翰林国史院が国初から中国人官僚に開放されていて、これが中国人にとって唯一の登龍門であったことを論述する。

明代については、草制の府である翰林院が前代の元制に依拠した点の多いことを、その機構や職掌上から立証したのち、明代における草制制度の特色として(1)院官が正官と講読官と史官との三官にわかれて、それぞれ分居したこと、(2)庶吉士が設置されたこと、(3)本院のほか南京翰林院が存置されたこと、(4)内閣が創設されて翰林院と内閣とで草制が外内に分掌されたことなどをあげる。最後に明代における内閣と草制制度との関係を考証して本論を終る。

なお、本論文のほか副論文として「唐宋時代に於ける翰林学士について」、「元代に於ける翰林学士院について」、「明代内閣制度の成立と発達」以下明代の草制制度に関する五編の論文をそえる。

論文審査の結果の要旨

中国の草制制度は君主権の消長を端的に表明する指標として、その研究は政治史上、制度史上重要な課題であるが、従来これを各時代を通じて追求したものがあつたことを聞かない。著者は明代を主に、中国歴代の草制制度の究明に多年研鑽をかさねてきたが、本論文はその集成である。

本論文では秦・漢時代から明末におよぶ中国歴朝の草制制度の推移・変革の迹が克明に考察されており、この分野の研究に貢献するところ大なるものがある。ただ論述の範囲が秦以後歴朝にわたるため、たとえば北朝期や元代には、なお究明さるべき部分が少なくないようである。しかし、各時代にわたり一様に十全な研究成果をのぞむことは至難であり、これは著者の今後の研究によって補われうること、本論文の真価をそこなうものではない。

以上審査の結果、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。

因子」と「2字目因子」が抽出された。

第3編 日本語近似系列の研究

ここでは、情報理論的な測度である近似度を操作して6実験を行ない、文章や系列の段階では、近似度が1つの重要な変数であることを見出した。また日本語の平均情報量と冗長度も測定されている。

以上のような、2字音節、1字音節、系列(文章)の3層にわたって分析された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、言語学習の基礎研究をめざしたものであって、言語学習の心理学的研究に常用される言語材料の諸性質を、日本語について体系的に測定し、これを規定する変数を明確にし、今後の心理学的研究に対して、材料面での条件設定をより確実、より容易ならしめんとしたものである。

本研究は、単語のモデルとして日本語2字音節をとり、その諸性質の測定を中心としているが、さらに単音節として清音1字音節、及び文章のモデルとして近似系列による文章材料についての測定及び実験的研究を加えて、日本語言語材料の総合的な研究を意図している。

本論文の意義は、従来散発的部分的に測定されていた言語材料の性質を、11個の測度により評定し、相互の関係を明らかにし、複雑な諸特性の整理を行なった点にある。11個の測度の中には、本研究者の創案による語頭頻度という測定値も含まれているが、これら11個の特性の因子分析を行ない、それぞれ意味性因子、頻度因子と名づける2個の因子を抽出した。言語材料の諸特性がこのような2因子に整理されたことは、この論文をもって最初とする。

さらに本論文はこの2因子を学習実験の変数として、実際に使用した場合の妥当性を検討しその実用性を証明している。

なお1字音節については、学習心理学的研究がまだ進められていなかったが、この研究によってその性質についての新知見が提供された。

本研究は、言語学習の基礎研究として、今後の教育心理学的研究の発展に資すること多大なものがあると考えられる。

よって、本論文は教育学博士の学位論文としてじゅうぶん価値あるものと認められる。